

秋深き

織田作之助

青空文庫

医者に診せると、やはり肺がわるいと言った。転地した方がよ
かろうということだった。温泉へ行くことにした。

汽車の時間を勘ちがいたらしく、真夜なかに着いた。駅に降
り立つと、くろぐろとした山の肌が突然眼の前に迫った。夜更け
の音がそのあたりにうずくまっているようだった。妙な時刻に着
いたものだど、しよんぼり佇んでいると、カンテラを振りまわし
ながら眠ったく駅の名をよんでいた駅員が、いきなり私の手から
切符をひったくった。

乗って来た汽車をやり過してから、線路を越え、誰もいない改
札口を出た。青いシエードを掛けた電球がひとつ、改札口の棚を

暗く照らしていた。薄よごれたなにかのポスターの絵がふと眼にはいり、にわかには夜の更けた感じだった。

駅をでると、いきなり暗闇につつまれた。

提灯が物影から飛び出して来た。温泉へ来たのかという意味のことを訊かれたので、そうだと答えると、もういつペンお辞儀をして、

「お疲れさんで……」

温泉宿の客引きだった。頭髪が固そうに、胡麻塩である。

こうして客引きが出迎えているところを見ると、こんな夜更けに着く客もあるわけかとなにかほっとした。それにしても、この客引きのいる宿屋は随分さびれて、今夜もあぶれていたに違いあ

るまいと思った。あとでこの温泉には宿屋はたった一軒しかないことを知った。

右肩下りの背中のおとについて、谷ぞいの小径を歩きだした。しかし、ものの二十間も行かぬうちに、案内すると見せかけた客引きは、押していた自転車に飛び乗って、

「失礼しやして、お先にやらしていただきやんす。お部屋の内意をしてお待ち申しておりやんすによつて、どうぞごゆるりお越し下されやんせツ」

あつという間に、闇の中へ走りだしてしまった。

私はことの意外におどろいた。

「あ、ちよつと……。宿はどこですか。どの道を行くんですか。

「ここ真つ直ぐ行けばいいんですか。宿はすぐ分りますか」

「へえ、へえ、すぐわかりますでやんす。真つ直ぐお出でになつて、橋を渡つて下されやんしたら、灯が見えますでござりやんす」

客引きは振り向いて言った。自転車につけた提灯のあかりがはげしく揺れ、そして急に小さくなつてしまった。

暗がりのなかへひとり取り残されて、私はひどく心細くなつた。汽車の時間を勘ちがいして、そんな真夜なかに着いたことといい、客引きの腑に落ちかねる振舞いといい、妙に勝手の違う感じがじりじりと来て、頭のなかが痒ゆくなつた。夜の底がじーんと沈んで行くようであつた。煙草に火をつけながら、歩いた。けむりにむせて咳が出た。立ち止まつてその音をしばらくきいていた。ま

た歩きだして、二町ばかり行くと、急に川音が大きくなって、橋のたもとまで来た。そこで道は二つに岐れていた。言われた通り橋を渡って暫らく行くと、宿屋の灯がぼつりと見えた。風がそのあたりを吹いて渡り、遠いながめだった。

ふと、湯気のおいが漂うて来た。光っていた木犀の香が消された。

風通しの良い部屋をと言うと、二階の薄汚い六畳へ通された。先に立った女中が襖をひらいた途端、隣室の話し声がびたりとやんだ。

女中と入れかわって、番頭が宿帳をもって来た。書き終つてふと前の頁を見ると、小谷治 二十九歳。妻糸子 三十四歳——と

いう字がぼんやり眼にはいった。数字だけがはつきり頭に來た。女の方が年上だなと思ひながら、宿帳を番頭にかえした。

「蜘蛛がいるね」

「へえ？」

番頭は見上げて、いますねと氣のない声で言つた。そしてべつだん捕えようとも、追おうともせず、お休みと出て行つた。

私はぼつねんと坐つて、蜘蛛の登音をきいた。それは、隣室との境の襖の上を歩く、さらさらとした音だつた。太長い足であつた。

寝ることになつたが、その前に雨戸をあげねばならぬ、と思つた。風通しの良い部屋とはどこをもつてそう言うのか、四方閉め

切ったその部屋のどこにも風の通う隙間はなく、湿っぽい空気が重く澱んでいた。私は大気療法をしると言った医者 of 言葉を想いだし、胸の肉の下がにわかになく痛んで来た、と思った。

まず廊下に面した障子をあげた。それから廊下に出て、雨戸をあげようとした。暫らくがたがたやってみたが、重かった。雨戸は何枚か続いていて、端の方から順おくりにならねば駄目だと、判った。そのためには隣りの部屋の前に立つ必要がある。私はしばらく躊躇ったが、背に腹は代えられぬと、大股で廊下を伝った。そして、がたがたやっていると、腕を使いすぎたので、はげしく咳ばらいが出た。その音のしずまって行くのを情けなくきいていると、部屋のなかから咳ばらいの音がきこえた。私はあ

わてて自分の部屋に戻った。

咳というものは伝染するものか、それとも私をたしなめるための咳ばらいだったのかなと考えながら、雨戸を諦めて寝ることにした。がらんとした部屋の真中にぼつりと敷かれた秋の夜の旅の蒲団というものは、随分わびしいものである。私はうつろな気持で寐巻と着かえて、しよんぼり蒲団にもぐりこんだ。とたんに儼くさい匂いがぷんと漂うて、思いがけぬ旅情が胸のなかを走った。じつと横たわっていると、何か不安定な気がして来た。考えてみると、どうも枕元と襖の間が広すぎるようだった。ふだん枕元に、スタンドや灰皿や紅茶茶碗や書物、原稿用紙などをごてごてと一杯散らかして、本箱や机や火鉢などに取りかこまれた蒲団の

なかに寝る癖のある私には、そのがらんとした枕元の感じが、さびしくてならなかった。にわかには孤独が来た。

旅行鞆からポケット鏡を取り出して、顔を覗いた。孤独な時の癖である。舌をだしてみたり、眼をむいてみたり、にきびをつぶしたりしていた。蒲団の中からだらんと首をつきだしたじじむさい恰好で、永いことそうやっている、ふと異様な影が鏡を横切った。蜘蛛だった。私はぎよつとした自分の顔を見た。そして思わず襖を見た。とたんに蜘蛛はぴたりと停って、襖に落した影を吸いながら、じつと息を凝らしていた。私はしばらく襖から眼をはなさなかった。なんとなく宿帳を想い出した。

いよいよ眠ることにして、灯を消した。そして、じつと眼をつ

むつていると、カシオペヤ星座が暗がりに泛び上つて来た。私は空を想つた。降るような星空を想つた。清浄な空気に渴えた。部屋のだこからも空気の洩れるところが無いということが、ますます息苦しく胸をしめつけた。明けはなたれた窓にあこがれた。いきなりシリウス星がきらめいた。私ははつと眼をあけた。蜘蛛の眼がキラキラ閃光を放つて、じつとこちらを見ているように思つた。夜なかに咳が出て閉口した。

翌朝眼がさめると、白い川の眺めがいきなり眼の前に展けていた。いつの間にか雨戸は明けはなたれていて、部屋のなかが急に軽い。山の朝の空気だ。それをがつかつと齧かじると、ほんとうに胸が清々した。ほつとしたが、同時に夜が心配になりだした。夜に

なれば、また雨戸が閉つて、あの重く濁つた空気を一晩中吸わねばならぬのかと思うと、痩せた胸のあたりがなんとなく心細い。たまらなかつた。

夜雨戸を閉めるのはいずれ女中の役目だろう故、まえもつてその旨女中にいいつけて置けば済むというものの、しかしもう晩秋だというのに、雨戸をあけて寝るなぞ想えば変な工合である。宿の方でも不要心だと思ふにちがいない。それを押して、病気だからと事情をのべて頼みこむ、——まずもつて私のような気の弱い者には出来ぬことだ。それに、ほかの病気なら知らず、肺がわるいと知られるのは大変辛い。

もうひとつ、私の部屋の雨戸をあけるとすれば、当然隣りの部

屋もそうしなくてはならない。それ故、一応隣室となりの諒解を求め
必要がある。けれど、隣室の人たちはたぶん雨戸をあけるのを好
まないだろう。

すっかり心が重くなつてしまった。

夕暮近く湯殿へ行つた。うまい工合に誰もいなかつた。小柄で、
痩せて、貧弱な裸を誰にも見られずに済んだと、うれしかつた。

湯槽に浸ると、びっくりするほど冷たかつた。その温泉は鉱泉を
温める仕掛けになつてはいるのだが、たぶん風呂番が火をいれるの
をうっかりしているのか、それとも誰かが水をうめすぎたのであ
ろう。けれど、気の弱い私は宿の者にその旨申し出ることもでき
ず、辛抱して、なるべく温味ぬくみの多そうな隅の方にちぢこまつて、

ぶるぶる顫えていると、若い男がはいつて来た。はれぼったい瞼をした眼を細めて、こちらを見た。近視らしかった。

湯槽にタオルを浸けて、

「えらい温ぬるそうだな」

馴々しく言った。

「ええ、とても……」

「……温るおまつか。さよか」

そう言いながら、男はどぶんと浸ったが、いきなりでかい声で、「あ、こら水みたいや。無茶しよる。水風呂やがな。こんなところはいって寒雀みたいに行水してたら、風邪ひいてしまうわ」そして私の方へ「あんた、よう辛抱したはりまんな。えらい人やな

あ」

曖昧に苦笑していると、男はまるで羽搏くような恰好に、しきりに両手をうしろへ泳がせながら、

「失礼でつけど、あんた昨夜おそ^{ゆうべ}うにお着きにならはった方と違
いまつか」

と、訊いた。

「はあ、そうです」

何故か、私は赧くなった。

「やっぱり、そうでつか。どうも、そやないか思てましてん。な
んや、戸がたがた言^ゆわしたはりましたな。ぼく隣りの部屋にいま
んねん。退屈でつしやる。ちと遊びに来とくなはれ」

してみると、昨夜の咳ばらいはこの男だったのかと、私にはわかに居たたまれぬ気がして、早々に湯を出てしまった。そして、お先きにと、湯殿の戸をあけた途端、化物のように背の高い女が脱衣場で着物を脱ぎながら、片一方の眼でじろりと私を見つめた。私は無我夢中に着物を着た。そして気がつくとき、女の眼はなおもじつと動かなかつた。もう一方の眼はあらぬ方に向けられていた。斜視だなと思つた。とすれば、ひよつとすると、女の眼は案外私を見ていないのかもしれない。けれどともかく私は見られている。私は妙な気持になつて、部屋に戻つた。

なんだか急に薄暗くなつた部屋のなかで、浮かぬ顔をしてぼんやり坐つてしていると、隣りの人たちが湯殿から帰つて来たらしい気

配がした。

男は口笛を吹いていたが、不意に襖ごしに声をかけて来た。

「どないだ(す)? 退屈でつしやる。飯が来るまで、遊びに来やはれしまへんか」

「はあ、ありがとう」

咽喉にひつ掛った返事をした。二、三度咳ばらいして、そのまま坐っていた。なんだかこの夫婦者の前へ出むく気がしなかつたのである。

「お出いなはれな」

再び声が来た。

すると、もう私は断り切れず、雨戸のことで諒解を求める良い

機会でもあると思い、立って襖をあけた。

その拍子に、粗末な鏡台が眼にはいった。背中を向けて化粧している女の顔がうつつていた。案の定脱衣場で見た顔だった。白粉の下に生気のない皮膚がたるんでいると、一眼にわかった。いきなり宿帳の「三十四歳」を想い出した。それより若くは見えなかった。

女はどうぞとこちらを向いて、宿の丹前の膝をかき合わせた。乾燥した窮屈な姿勢だった。座っていても、いやになるほど大柄だとわかった。男の方がずっと小柄で、ずっと若く見え、湯殿のときとちがって黒縁のロイド眼鏡を掛けているため、一層こぢんまりした感じが出ていた。顔の造作も貧弱だったが、唇だけが不

自然に大きかった。これは女も同じだった。女の唇はおまけに著しく歪んでいた。それに、女の斜やぶにらみ眼は面と向つてみると、相当ひどく、相手の眼を見ながら、物を言う癖のある私は、間諜つかざるを得なかった。

暫らく取りとめない雑談をした末、私は機を求めて、雨戸のことを申し出た。だしぬけの、奇妙な申し出だった故、二人は、いえ、構いません、どうぞおあけになつて下さいと言つたものの、変な顔をした。もう病氣のことを隠すわけにはいかなかった。

「……実は病氣をしておりますので。空気の流通をよくしなければいけないんです」

すると、女の顔に思いがけぬ生氣がうかんだ。

「やっぱり御病氣でしたの。そやないかと思てましたわ。——ここですか」

女は自身の胸を突いた。なぜだか、いそいそと嬉しそうであった。

「ええ」

「とても痩せてはりますもの。それに、肩のところなんか、やるせないくらい、ほっそりしてなさるもの。さつきお湯で見たとき、すぐ胸がお悪いねんやなあと思いましたわ」

そんなに仔細に観察されていたのかと、私は腋の下が冷たくなつた。

女は暫らく私を見凝めるともなく、想いにふけるともなく捕え

がたい視線をじつと釘づけにしていたが、やがていきなり歪んだ唇を痙攣させたかと思うと、

「私の従兄弟が丁度お宅みたいだから恰好でしたけど、やつぱり肺でしたの」

膝を撫でながらいった。途端に、どういふものか男の顔に動揺の色が走った。そして、ひきつるような苦痛の皺があとに残ったので、びっくりして男の顔を見ていると、男はきつとした眼で私をにらみつけた。

しかし、彼はすぐもとの、鈍重な、人の善さそうな顔になり、「肺やったら、石油を飲みなはれ。石油を……」

意外なことを言いだした。

「えッ？」

と、訊きかえすと、

「あんた、知りはれしまへんのんか。肺病に石油がよう効くということは、今日きょうび誰でも知つてることでんがな」

「初耳ですわね」

「さよか。それやったら、よけい教え甲斐がおますわ」

肺病を苦にして自殺をしようと思ひ、石油を飲んだところ、かえつて病気が癒つた、というような実話を例に出して、男はくどくどと石油の卓効に就いて喋つた。

「そんな話迷信やわ」

いきなり女が口をはさんだ。斬り落すような調子だった。

風が雨戸を敲いた。

男は分厚い唇にたまった泡を、素早く手の甲で拭きとった。少しよだれが落ちた。

「なにが迷信や。迷信や思う方がどだい無智や。ちゃんと实例が証明してるやないか」

そして私の方に向って、

「なあ、そうでつしやる。違いまつか。どない思いはります？」

気がつくつと、前歯が一枚抜けているせいか、早口になると彼の言葉はひどく湿り気を帯びた。

「……………」

私は言うべきことがなかった。すると、もう男はまるで喧嘩腰

になった。

「あんたも迷信や思いはりまつか、そら、そうでつしやる。なんせ、あんたは学がおまつさかいな。しかし、僕かて石油がなんぜ肺にきくかちゆうことの科学的根拠ぐらいは知つてまつせ。と、いうのは外やおまへん。ろくろ首いうもんおまつしやる。あの、ろくろ首はでんな、なにもお化けでもなんでもあらへんのでつせ。だいたい、このろくろ首いうもんは、苦界に沈められている女から始まったことで、なんせ昔は雇主が強欲で、ろくろく女子^{おなご}に物を食べさしよれへん。虐待しよつた。そこで女子は栄養がとれんで困る。そこへもつて来て、勤めがえらい。蒼い顔して痩せおとろえてふらふらになりよる。まるでお化けみたいになりよる。そ

れが、夜なかに人の寝静まった頃に蒲団から這いだし行燈の油を嘗めよる。それを、客が見て、ろくろ首や思いよつたんや。それも無理のないとこや。なんせ、痩せおとろえひよろひよろの細い首しとるとこへもつて来て、大きな髪を結うとりまっしやる。寝ぼけた眼で下から見たら、首がするする伸びてるように思うや。おまへんか。ところで、なぜ油を嘗めよつたかと言うと、いまもいう節で、虐待されとるから油でも嘗めんことには栄養の取りよ様がよない。まあ、言うたら、止むに止まれん栄養上の必要や。それに普通の冷たやつやつたら嘗めにくいけど行燈の奴は火イで温くめたアるによつて、嘗めやすい。と、まあ、こんなわけだす。いまでも、栄養不良の者もんは肝油たらいうてやつぱり油飲むやおま

へんか。それ考えたら、石油が肺に効くいうたことぐらいは、ちやんと分りまつしやないか。なにが迷信や、阿呆らしい」

女はさげすむような顔を男に向けた。

私は早々に切りあげて、部屋に戻った。

やがて、隣りから口論しているらしい気配が洩れて来た。暫らくすると、女の泣き声がかきこえた。男はぶつぶつした声でなだめていた。しまいには男も半泣きの声になった。女はヒステリックになにごとか叫んでいた。

夕闇が私の部屋に流れ込んで来た。いきなり男の歌声がした。他愛もない流行歌だった。下手糞なので、あきれていると、女の歌声もまじり出した。私はますますあきれた。そこへ夕飯がはこ

ばれて来た。

電燈をつけて、給仕なしの夕飯をぽつねんと食べていると、ふと昨夜の蜘蛛が眼にはいった。今日も同じ襖の上に蠢いているのだった。

翌朝、散歩していると、いきなり背後うしろから呼びとめられた。

振り向くと隣室となりの女がひとりで大股にやって来るのだった。近づいた途端、妙に熱っぽい体臭がぷんと匂った。

「お散歩ですか？」

女はひそめた声で訊いた。そして私の返事を待たず、「御一緒に歩けません？」

迷惑に思ったが、まさか断るわけにはいかなかった。

並んで歩きだすと、女は、あの男をどう思うかといきなり訊ねた。

「どう思うって、べつに……。そんなことは……」

答えようもなかったし、また、答えたくもなかった。自分の恋人や、夫についての感想をひとに求める女ほど、私にとってきらいなものはまたと無いのである。露骨にいやな顔をしてみせた。

女はすかさされたように、立ち止まって暫らく空を見ていたが、やがてまた歩きだした。

「貴方おうちのような鋭い方は、あの人の欠点くらいすぐ見抜ける筈でつけど……」

どこを以って鋭いというのかと、あきれていると、女は続けて、

さまざま男の欠点をあげた。

「……教養なんか、ちよつともあれしませんの。これが私の夫ですというて、ひとに紹介も出来でしませんわ。字ひとつ書かしても、そらもう情けないくらいですわ。ちよつとも知性が感じられませんか。ほんまに、男の方で、筆蹟をみたらいつぺんにその人がわかりますのねえ」

私はむかむかツとして来た、筆蹟くらいで、人間の値打ちがわかってたまるものか、近頃の女はなぜこんな風に、なにかと言えば教養だとか、筆蹟だとか、知性だとか、月並みな符号を使つて人を批評したがるのかと、うんざりした。

「奥さんは字がお上手なんですな」

しかし、その皮肉が通じたかどうか、顔色も声の調子も変えなかった。じつと前方を見凝めたまま相変らず固い口調で、

「いいえ、上手と違いますわ。この頃は気持が乱れていますのんか、お手が下ったて、お習字の先生に叱られてばかりしていますんです。ほんまに良い字を書くのは、むつかしいですわね。けど、お習字してますと、なんやこう、悩みや苦しみがみな忘れてしまえるみたい氣イしますのんで、私好きです。貴方なんか、きつとお習字上手やと思いますわ。お上手なんでしょう？ いっぺん見せていただきたいいわ」

「僕は字なんかいつぺんも習ったことはありません。下手糞です。下品な字しか書けません」

しかし、女は気にもとめず、

「私、お花も好きですのん。お習字もよろしいですけど、お花も
気持が浄められてよろしいですわ。——私あんな教養のない人と
一緒になつて、ほんまに不幸な女でしょう？ そやから、お習字
やお花をして、慰めるより仕方あれしません。ところが、あの人
はお習字やお花の趣味はちよつともあれしませんの」

「お茶は成さるんですか」

「恥かしいですけど、お茶はあんまりしてませんの。是非教わろ
うと思てるんですけど。——ところで、話ちがいますけど、おうち貴方
キネマスターで誰がお好きですか？」

「……………」

「私、絹代が好きです。一夫はあんまり好きやあれしません。あの人は高瀬が好きや言いますのんです」

「はあ、そうですか」

絹代とは田中絹代、一夫とは長谷川一夫だとうやうやわかったが、高瀬とは高瀬なにがしかと考えていると、

「貴方おうちは誰ですか？」

「高瀬です」

つい言った。

「まあ」

さすがに暫らくあきれていたようだったが、やがて、

「高瀬はまあええとして、あの人はまた、〇〇〇が好きや言うん

です。私、あんな下品な女優大きらいです。ほんまに、あの人みたいな教養のない人知りませんわ」

私はその「教養」という言葉に辟易した。うじゃうじゃと、虫が背中を這うようだった。

「ほんまに私は不幸な女やと思いますわ」

朝の陽が蒼黝い女の皮膚に映えて、鼻の両脇の脂肪を温めていた。

ちらとそれを見た途端、なぜだか私はむしろ女があわれに思えた。かりに女が不幸だとしても、それはいわゆる男の教養だけの問題ではあるまいと思った。

「何べん解消しようと思ったかも分れしまへん」

解消という言葉が妙にどぎつく聴こえた。

「それを言いだすと、あの人はすぐ泣きだしてしもて、私の機嫌とるのんですわ。私がヒステリー起こした時は、ご飯かて、たいてくれます。洗濯かて、せえ言うたら、してくれます。ほんまによう機嫌とります。けど、あんまり機嫌とられると、いやですもん。なんやこう、むく犬の尾が顔にあたつたみたいで、気色がわるうてわるうてかないませんのですわ。それに、えらい焼餅やきですの。私も嫉妬りんきしますけど、あの人ののは、もつとえげつないんです」

顔の筋肉一つ動かさずに言った。

妙な夫婦もあるものだ。こんな夫婦の子供はどんな風に育てら

れているのだろうと、思ったので、

「お子さんおありなんでしよう？」

と、訊くと、

「子供はあれしませんの。それで、こうやってこの温泉へ来てるんです。ここの温泉にはいると、子供が出来るて聞きましたので……」

あつ、と思った。なにが解消なもんかと、なにか莫迦にされて
いるような気がした。

いつか狭霧が晴れ、川音が陽の光をふるわせて、伝わって来た。
女のいかつい肩に陽の光がしきりに降り注いだ。男じみたいかり
肩が一層石女を感じさせるようだ、見てみると、突然女は立ち

すくんだ。

見ると隣室の男が橋を渡つて来るのだった。向うでも見つけた。そして、いきなりくるりと身をひるがえして、逃げるように立ち去つてしまった。ひどくこせこせした歩き方だった。それがなにかあわれだった。

女は特徴のある眇眼を、ぱちぱちと痙攣させた。唇をぎゅつと歪めた。狼狽をかくそうとするさまがありありと見えた。それを見ると、私もまた、なんということもなしに狼狽した。

やがて女は帯の間へさしこんでいた手を抜いて、不意に私の肩を柔かく敲いた。

「私を尾行しているのんですわ。いつもああなんです。なにしろ、

嫉妬りんき深い男ですよって」

女はにこりともせずになんか言うのと、ぎろりと眇眼をあげて穴のあくほど私を見凝めた。

私は女より一足先に宿に帰り、湯殿へ行つた。すると、いつの間にか帰っていたのか、隣室の男がさきに湯殿にはいつていた。

ごろりとタイルの上に仰向けに寝そべっていたが、私の顔を見ると、やあ、と妙に威勢のある声とともに立ち上つた。

そして、私のあとから湯槽へはいつて来て、

「ひよつとしたら、ここへ来やはるやる思てました」

と、ひどく真面目な表情で言つた。それでは、ここで私を待ち伏せていたのかと、返事の仕様もなく、湯のなかでふわりふわり

からだを浮かせていると、いきなり腕を掴まれた。

「彼女はなんぞ僕の悪ぐち言うてましたやろ？」

案外にきつい口調だった。けれど、彼女という言い方にはなにか軽薄な調子があつた。

「いや、べつに……」

「嘘言いなはれ。隠したかてあきまへんぜ。僕のことなんぞ聴きはりましたやろ。違いまつか。僕のにらんだ眼にくるいはおまつか。どないだ(す)？ 聴きはれしめへんか。隠さんと言つとくはなはれ」

ねちねちとからんで来た。

私は黙っていた。しかし、男は私の顔を覗きこんで、ひとりう

なずいた。

「黙つたはるとこ見ると、やつぱり聴きはつたんやな。——なんぞ僕のわるいことを聴きはつたんやろ。しかし、言うときまつけどね。彼女の言うことを信用したらあきまへんぜ。あの女子は嘘おなごつきですよつてな。わてはだまされた、わては不幸な女子や、とこないひとに言いふらすのが彼女の癖でんねん。それが彼女の手工でんねん。そない言うてからに、うまいこと相手の同情ひきよゆうべりまんねんぜ。ほら昨夜ゆうべ従兄弟がどないやとか、こないやとか言うとりましたやろ、あれもやつぱり手工だんねん。なにが彼女に従兄弟みたいなもんおますかいな。ほんまにあんた、警戒せなあきまへんぜ」

警戒とは大袈裟な言い方だと、私はいささかあきれた。

「ところで、彼女は僕のこと如何ど言うつもりでした？ 悪い男や言うつもりでしたやろ？ 焼餅やきや言うてしまへんでしたか。どうせそんなことでっしやろ。なにが、僕が焼餅やきますかいな。彼女の方が余っ程焼餅やきでっせ。一緒に道歩いてても、僕に女子の顔見たらいかん、こない言いよりまんねん。活動見ても、綺麗な女優が出て来たら、眼工つぶつとれ、とこない言いよりまんねん。どだい無茶ですがな。ほんまにあんな女子にかかったら、一生の損でっせ。そない思いはれしまへんか」

じつと眼を細めて、私の顔を見つめていたが、それはそうと、とまた言葉を続けて、

「石油どないだ（す）？ まだ、飲みはれしまへんか。飲みなはれな。よう効くんできどな。ちよつとも毒なことおまへんぜ」
その時、脱衣場の戸ががらりとあいた。

「あ、来りました」

男はそう私の耳に囁いて、あと、一言も口を利かなかつた。

部屋に戻つて、案外あの夫婦者はお互い熱心に愛し合つてい
るのではないか、などと考へていると、湯殿から帰つて来た二人は
口論をやり出した。

襖越しにきくと、どうやら私と女が並んで歩いたことを問題に
しているらしく、そんなことで夫婦喧嘩されるのは、随分迷惑な
話だと、うんざりした。

夕飯が済んだあと、男はひとりで何処かへ出掛けて行ったらしかった。私は療養書の注意を守って、食後の安静に、畳の上に寝そべっていた。

虫の音がきこえて来た。背中までしみ透るように澄んだ声だった。

すつと、衣ずれの音がして、襖がひらいた。熱っぽい体臭を感じて、私はびっくりして飛び上った。隣室の女がはいつて来たのだった。

「お邪魔やありません？」

襖の傍に突つたまま、言った。

「はあ、いいえ」

私はきよとんとして坐っていた。

女はいきなり私の前へぺったりと坐った。膝を突かれたように思った。この女は近視だろうか、それとも、距離の感覚がまるでないのだろうか、なんとなく迷惑していると、

「いま、ちよつと出掛けて行きましたの」

その隙に話しに来た、——そんなことをされては困ると思った。私はむつかしい顔をした。

女はでかい溜息をつき、

「あの男にはほんまに困ってしまいます」

と、言つて分厚い唇をぎゅつと歪めた。

「——あの人、なんぞ私のこと言いましたか。どうせ私の悪ぐち

言うたことやと思います。それがあの人の癖なんです。誰にでも私の悪ぐちを言うてまわるのんです。なんせ肚の黒い男ですよつて、なにを言うか分れしません。けど、あんな男の言うこと信用せんといして下さい。何を言うても良え加減にきいといして下さい」

「いや、誰のいうことも僕は信用しません」

全く、私は女の言うことも男の言うことも、てんで身を入れてきかない覚悟をきめていた。

「それをきいて安心しました」

女は私の言葉をなるときいたのか、生真面目な顔で言った。私はまだこの女の微笑した顔を見ていない、とふと思った。

そして、私もこの女の前で一度も微笑したことはない……。

女はますます仮面めんのような顔になった。

「ほんまに、あの人くらい下劣な人はあれしませんわ」

「そうですかね。そんな下劣な人ですかね。よい人のようじゃありませんか」

その気もなく言うと、突然女が泪をためたので驚いた。

「貴方おうちにはなにも分れしませんのですわ。ほんまに私は不幸な女ですわ」

うるんだ眼で恨めしそうに私をにらんだ。視線があらぬ方へそれている。それでますます恨めしそうだった。

私は答えようもなく、いかにも芸のなさそうな顔をして、黙っていた。

すると、女の唇が不気味にふるえた。そして大粒の泪が蒼黝い皮膚を汚して落ちて来た。ほんとうに泣き出してしまったのだ。

私は頗る閉口した。どういふ風に慰めるべきか、ほとほと思案に余った。

女は袂から器用に手巾をとりだして、そしてまた泣きだした。

その時、思いがけず廊下に足音がきこえた。かなり乱暴な足音だった。

私はなぜかはっとした。女もいきなり泣きやんでしまった。急いで泪を拭ったりしている。二人とも妙に狼狽してしまつたのだ。障子があいて、男がやあ、とはいって来た。女がいるのを見て、あつと思つたらしかつたが、すぐにこにこした顔になると、

「さあ、買って来ましたぜ」

と、新聞紙に包んだものを、私の前に置いた。罫のようだったから、訳がわからず、変な顔をしていると、男は上機嫌に、

「石油だ（す）。石油だす。停留場の近所まで行て、買って来ましてん。言うだけやったら、なんぼ言うたかてあんたは飲みなはれんさかい、こら是が非でも膝詰談判で飲まさな仕様ない思て、買って来ましてん。さあ、一息にぱつと飲みなはれ」

と、言いながら、懐ろから盃をとり出した。

「この寸口ちよくに一杯だけでよろしいねん。一日に、一杯ずつ、一週間も飲みはったら、あんたの病氣くらいぱらぱらつといっぺんに癒ってしまいまっせ。けっ、けっ、けっ」

男は女のいることなぞまるで無視したように、まくし立て、しまいには妙な笑い声を立てた。

「いずれ、こんど……」

機会があつたら飲みましよう、ともかく私は断つた。すると、男は見幕をかえて、

「こない言うても飲みはれしまへんのんか。あんた！」
きつとにらみつけた。

その眼付きを見ると、嫉妬深い男だと言つた女の言葉が、改めて思ひだされて、いまさきまで女と向い合つていたということが急に強く頭に來た。

「しかし、まあ、いずれ……」

曖昧に断りながら、ばつのわるい顔をもて余して、ふと女の顔を見ると、女は変に塩垂れて、にわかには皺がふえたような表情だった故、私はますます弱点を押さえられた男の位置に坐ってしまった。莫迦莫迦しいことだが、弁解しても始まらぬと、思った。男の無理強いをどうにも断り切れぬ羽目になったらしいと、うんざりした。

しかし、なおも躊躇っていると、

「これほど言うても、飲んでくれはれしまへんか」
と男が言った。

意外にも殆んど哀願的な口調だった。

「飲みましょう」

釣りこまれて私は思わず言った。

「あ、飲んでくれはりまつか」

男は嬉しそうに、罎の口をあけて、盃にどろつとした油を注いだ。変に薄気味わることだ。

「あ、蜘蛛！」

不意に女が言つて、そして本を読むような味もそっけもない調子で、

「私蜘蛛、大きらいです」

と、言つた。

だが、私はそれどころではなかつた。私の手にはもう盃が渡されていたのだ。

「まあ、肝油や思て飲みなはれ。毒みたいなもんはいつてまへんよつて、安心して飲みなはれ。けつ、けつ、けつ、けつ」

男は顔じゆう皺だらけに笑つた。

私はその邪氣のなさそうな顔を見て、なるほど毒などはいつてゐるまいと思つた。

そして、眼を閉じて、ぷんと異様な臭いのする盃を唇へもつて行き、一息にぐつと流し込んだ。急にふらふらつと眩暈めまいがした咄嗟に、こんな夫婦と隣り合つたとは、なんという因果なことだろうという気持が、情けなく胸へ落ちた。

翌朝、夫婦はその温泉を発つた。私は駅まで送つて行つた。

「へえ、へえ、もう、これぐらい滞在なすつたら、ずっと効目は

「ござりやんす」

駅のプラットホームで客引きが男に言っていた。子供のことを言っているのだな、と私は思った。

「そやろか」

男は眼鏡を突きあげながら、言った。そして、売店で買物をしていた女の方に向って、

「糸枝！」

と、名をよんだ。

「はい」

女が来ると、

「もう直き、汽車が来るよって、いまのうち挨拶させて貰い」

「はい」

女はいきなりシヨールをとつて、長つたらしい挨拶を私にした。終ると、男も同じように、糞丁寧な挨拶をした。

私はなにか夫婦の営みの根強さというものをふと感じた。

汽車が来た。

男は窓口からからだを突きだして、

「どないだ(す)。石油の効目は……?」

「はあ。どうも昨夜から、ひどい下痢をして困ってるんです。ほんとうのことを言った。」

「あ、そら、いかん。そら、済まんことした。竹の皮の黒焼きを煎じて飲みなはれ。下痢にはもってこいでつせ」

男は狼狽して言った。

汽車が動きだした。

「竹の皮の黒焼きでっせ」

男は叫んだ。

汽車はだんだんにプラットホームを離れて行った。

「竹の皮の黒焼きでっせ」

男の声は莫迦莫迦しいほど、大きかった。

女は袂の端を掴み、新派の女優めいた恰好で、ハンカチを振った。似合いの夫婦に見えた。

青空文庫情報

底本：「定本織田作之助全集 第二卷」文泉堂出版

1976（昭和51）年4月25日初版発行

1995（平成7）年3月20日第3版

初出：「大阪文学」

1942（昭和17）年1月号

入力：奥平 敬

校正：小林繁雄

2008年11月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秋深き

織田作之助

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>